長野県内の銀行では、蔵相失言による取り付け騒ぎはなかったものの、昭和恐慌による業績不振で、各銀行とも預金の減少が目立った。これとは逆に貸し出し金は増えた。そこで政府は中小銀行の合併を呼びかけ、これにこたえて県内でも「信濃銀行」が誕生した。

だが、スタートしたものの、信濃銀行の前途は難関続きだった。合併時の不良債権引継ぎの不手際に加え、繭価暴落によって、支払い停止に追い込められ、破たんという事態となった。

この結果は当然のことながら、県内の十九銀行、六十三銀行にも大きな影響を与えた。半年後には両行とも、預金量は半減という厳しい結果が出た。

この事態に両行幹部はひそかに東京で協議した。その結果、両行は親銀行だった三菱銀行瀬下の仲介で一九三一（昭和6）年八月一日に合併した。新行名は両行の数合わせで「八十二銀行」となった。これによって長野県の金融危機はほぼ解消され、瀬下は「信州財界の救世主」としてその名を残した。

上田市にあった第十九銀行（左）と長野市にあった六十三銀行（右）
『八十二銀行五十年史』所収

●日銀総裁を断る

瀬下は信州人らしい、気骨ある人でもあった。広田弘毅内閣が総辞職したとき、これに殉じて深井英五日銀総裁も辞任した。その後任選考のとき、財界からは三菱銀行会長の瀬下を推す声が強かった。これを聞いた瀬下は

「オレは学問はないし、銀行小僧だ。三菱を死に場所にしているのに、余計なことをするな」

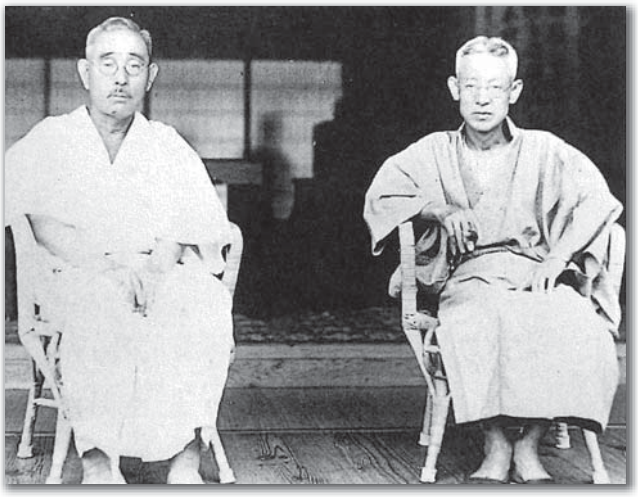
とカンカンに怒った。

そうした「頑固」さのある反面、郷里の青年たちのためにと、生家に近い野沢中学（現野沢北高校）には大学並みの化学実験室、佐久市前山の貞祥寺には図書館をそれぞれ寄付している。さらに「信越線御代田駅の待合室には暖房施設がない。何とかしてくれ！」という新聞の投書をみて、匿名で金を送り、ストーブが設置されたということもあった。

瀬下は一九三八（昭和13）年三月まで三菱銀行会長をつとめたが、病いが重くなったので辞任、その半年後に亡くなった。彼の死を惜しむ追悼記事は次のように報じた。

「……異論のように見えても、いつも実地と経験と勉強を教える常道を、一歩も踏みはずしていなかった」

（中村勝実）



同郷の神津藤平（左）と志賀高原で談笑する瀬下（右）
『信州人物風土記・近代を拓く第12巻
観光信州・信念の先覚者　神津藤平』所収

参考文献
中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫟

佐久の先人たち㉕

信州財界の救世主

瀬下（せじも） 清（きよし）

（1874～1938年）

三菱の会長でありながら、その生涯を“銀行小僧”で通した金融マン。昭和恐慌で危機にひんした信州二大銀行を統合、「八十二銀行」として誕生させた功績は、信州経済史に不滅の光を放っている。

●蔵相の発言で取り付け騒ぎ

瀬下清は、三塚村（現佐久市三塚）の出身で、家は代々名主をつとめ、旧藩時代は龍岡藩一の大地主だった。六歳のとき分家の養子となり上京した瀬下は、東京神田一ツ橋の東京高等商業学校付属主計学校を一八九三（明治26）年に卒業した。ここは後に東京商大に昇格、戦後は発祥の地名をとって一橋大学となった。

はじめ百十九国立銀行に勤めた瀬下は、二年後に三菱合資会社銀行部に移った。当時の彼は毎朝、弁当を二つ持って出勤した。一つは昼に銀行で食べ、夜は銀行から夜学に直行、ここで二つ目を食べていた。

銀行家の彼が、大器の片りんをみせたのは神戸支店長時代であった。当時、経営不振のうえに金融難で困っていた灘の酒造会社「桜正宗」に、破格の融資をして立ち直らせた。企業に誠実と熱意があれば、彼はどこまでも面倒をみた。それが銀行家のつとめ、と心得ていた。だが誠実と熱意に欠ける企業には、たとえ業績がよくても、冷淡だった。

日露戦争の勝利とともに、わが国の国威はめざましく伸びた。地方にも鉄道が敷設され、商品の流通から地方産業の台頭となった。長野県でも製糸業が大きく発展し、金融機関も各地に誕生した。大正のはじめには、普通銀行が一一六行もあったという。

一九一九（大正8）年、三菱合資会社銀行部は「三菱銀行」として分離独立、これとともに瀬下は常務に昇格した。以来一五年間にわたってその職にあり、今日の基礎を築いた。

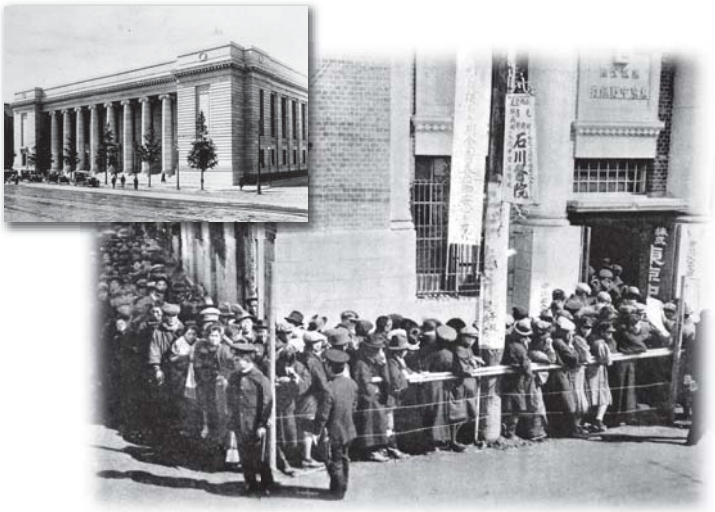
一九二七（昭和2）年三月、折から開会中の衆議院本会議で、片岡直温（なおはる）蔵相が不用意にも「銀行の経営が危機にひんしている」と発言した。これが引き金となって、その日のうちに、全国の各銀行には預金者が殺到し、預金引き出しの取り付け騒ぎとなった。この蔵相発言で破産した銀行は、全国で二八行にも及んだ。

●瀬下の演説で危機救う

東京中野銀行も同様で、銀行には預金者の長い列が続き、みんな預金の引き出しにかかった。この時瀬下はトラックに大金を積んでかけつけ、行列の群衆に叫んだ。

「私は三菱銀行の瀬下です。中野銀行には三菱が控えています。みなさんのお金は、この三菱が保証します。絶対大丈夫、あわてないでください」

ツルのようにやせた瀬下だが、その演説には迫力があった。取り付け騒ぎは水を引いて、東京中野銀行は危機を脱した。



預金引き出しのため東京中野銀行に殺到した預金者
『日本の百年・写真で見る風俗文化史』毎日新聞社編
左上は三菱銀行本店（日本建築学会図書館蔵）